

富士市の歴史文化探訪

古路の石造物

いにしえみち



春伯

春伯



## はじめに

まちなかでふと道の傍らに目を向けると、神仏の姿や文字が彫刻された石造物を見かけることがあります。これらの多くは、その地域で暮らす人々が建てたもので、現在でも花や水が供えられていたりします。

このような石造物は、人々が行き交う場所に祀られるものが多かったため、古い街道沿いにある場合が多く、石造物の位置からかつてのまち並みをイメージすることができます。

しかし、近代以降、経済成長などによるインフラ整備や大規模開発などをきっかけに、石造物は付近の神社や集会所の土地に移設されたり、場合によっては処分されてしまったりするなど、その存在意義が希薄になっていきました。また、古い街道も、新しい道路に付け替えられて原形を留めなかったり消失したりして、その道筋が曖昧になってしまっているのが現状です。

そこでこのパンフレットでは、主に明治時代以前からの旧道（推定地）沿いにあるものを中心に、こうした路傍の石造物のうち今日でもなお現存しているものを取り上げて、その位置と種類を示しています。本書を片手にまち歩きに出かければ、今も生きる古の文化に触れることができ、富士市のまち並みに新しい風景を感じることができるとも思いません。そして、富士市の豊かな歴史と文化を改めて知ること、先人の残した風景が後世に伝えられれば幸いです。

# 目次

富士市の古道	2
富士市の石造物の概要	2
主な石造物の種類	3
古路と石造物全体マップ	6
十里木道と仁藤春耕の道しるべ	8
根方街道①（須津地区周辺）	10
根方街道②（吉永地区周辺）	12
根方街道③（今泉地区周辺）	14
大宮道と室伏半蔵の道しるべ	16
身延道(松野地区周辺)	18
その他の主な石造物	20
年代表	21

## 〈凡例〉

・古道の推定路は破線で示した。紹介した古道は、明治23年測量の地図から、当該ルートに当たる道を推測し、現在の道路と最も適合する道に充てた。既に存在しない道については、妥当と思われる近接の道路に代替して経路を繋げた。また、身延道に限っては、静岡県教育委員会『静岡県歴史の道調査報告書』に拠り、存在しない道については前述と同様の対応とした。

・本書掲載の石造物は、原則として、道路上や公益性の高い施設、あるいは神社仏閣など、通常の進入が可能な施設に存在するものを選定した。個人住宅や店舗・工場など無断で進入できない場所に存在する石造物については掲載していない。ただし、路上から視界を遮るものがなく、進入しなくても明らかに確認できるものについてはこの限りでない。




・地図上の石造物の位置は「●」で示し、隣に通し番号（ページ毎）を記した。ただし、同一箇所に複数石造物がある場合は、通し番号を位置関係に揃えて配置し、枠で囲った。また、位置関係が複雑なものについては、配置図を挿入し、位置と通し番号を示した。

・通し番号を付った石造物は別表に種類と建立年を記した。建立年は、年号とその年数のみを記し、干支や月日は読み取れる場合でも割愛した。

・本書では、原則として、昭和期以前に建立した石造物を掲載の対象とした。また、墓、卵塔（僧の墓）や、神社仏閣の灯籠、水盤、狛犬、鳥居、個人の屋敷神の石祠、石造以外の神仏像等については掲載しなかった。これらは、配置図にて、必要に応じて「○」で示し、場合によってはその種類を記した。

■ は種類にかかわらず物体の存在を示したものである。

・地図は、上が真北を指し、枠で囲った通し番号の位置関係もこれに準じる。配置図では図内で方位を示している場合、これに従うものとする。

・「仁藤春耕の道しるべ」及び「室伏半蔵の道しるべ」については、前者を「」、後者を「」として位置を示した。数字は、「第〇号」といった、周知の通し番号を示した。なお、「」は、現在移設された仁藤春耕の道しるべの元の位置を示している。

## 富士市の古道

庶民の生活文化は、道の繋がりによって近隣の村々からもたらされます。富士市域では、古くからの主要道として東西の幹線路・東海道のほか、富士山や愛鷹山あしたかやまの山麓、富士川沿いなど地形に即した街道が、各方面へ放射状に繋がっています。このため、道には様々な地域の文化が見られます。古道上の石造物はその影響がよく反映されており、地域の特性を知る上で大変貴重な資料となります。

## 富士市の石造物の概要

石造物は、マチやムラの境や道辻、坂や橋のたもとなどに多く祀られています。このような場所は、物理的な境界であるとともに、古くから日本人の観念の中で、内と外を繋ぐ場所、この世とあの世が交錯する場所として認識されてきました。そして、人々はここに石造の神仏を祀ることで、災厄がムラに入り込むのを防いだり、靈魂を供養したり、五穀豊穡や子孫繁栄などの御利益を願ったりする特別な空間としました。一般的にこれらの石造物は、個人で設置するものよりも、地域の代表者や住民の連名によるものが多く、地域社会にとって重要なものであったといえます。そのため、祀っている石造物の種類から、その地域の社会的特性をうかがい知ることができるのです。

石造物の形状は、神仏像を彫ったものや神仏名の文字を彫った碑、石祠などがあります。また、像そのものだけの丸彫りや、像の前面だけを浮彫りにして、背面は身体が発光している状態を表現した光背、特に、船首を上にして立てたような形の「舟光背ふなこうはい」を彫ったものが見られます。他にも自然石をそのまま利用したものなどがあります。

現在、富士市内には、およそ四五〇〇基もの石造物（墓石を除く）が確認され、そのほとんどが江戸時代の中ごろから明治時代の間造られました。種類別に見ると、寺社の施設（灯籠や鳥居等）を除けば、馬頭観音が最多数で約四〇〇基、次いで道祖神が約三〇〇基あります。田子の浦から富士山麓まで様々な地理的条件を持つ富士市では、地区ごとで石造物の種類や形状に偏りがあるのも特徴です。



## 主な石造物の種類

**道祖神** 全国的には、中日本・東

日本に多く、サイノカミ・サエノカミ（賽の神）、ドウロクジン（道陸神）などとも呼称されます。村の境や道の辻などに祀られ、疫病（やみびょう）悪鬼（あくま）の侵入を防ぐとされたり、行路の神や性の神、子供の守護など、様々な性格を持ちます。形態は、

市内では文字碑や、単体の神像（単体道祖神）、男女一对の神像（双体道祖神）、性器を象つたものなどが多くあります。特に単体道祖神のうち、僧形丸彫坐像のものは「伊豆型」と呼ばれ、伊豆に多く分布していますが、伊豆より西側では富士市の富士川東岸までが主な分布域で、富士市の北西に隣接

する富士宮市では見られません。

一方で、双体道祖神は長野県を中心に分布し富士宮市でも非常に多いため「大宮型」とも呼ばれています。富士市では富士宮市に接する北西部で多数分布しますが、市

内全体での広がりは見られません。これに対して、富士川下流以西では道祖神自体がほとんど無く、市内では南松野に双体道祖神が数基と、北松野に山梨県に多く分布する丸石道祖神が一基あるのみです。道祖神は小正月行事のほとんどん焼きとの結びつきが強く、市内の神戸や石井では道祖神に仮小屋を組ん



正月飾りの小屋で祀られた道祖神  
(神戸1丁目)

で祀ったり、「鵜無ヶ淵では道祖神に性器形の作り物を飾ったりします。柏原では道祖神をほとんどん焼きの火に直接放り込んで厄を払う風習がありました。

**庚申塔** 中国の道教の思想では、

六十日周期にくる庚申の日、夜寝ている間に体内から三尸（さんし）の虫が抜け出して、その人の日頃の悪い行いを天帝に告げて寿命を縮めてしまふというものがあります。そのため、この日は人々が集まって寝ずに夜明けを待つ庚申待ち（こうしんまち）が各地で盛んに行われ、彼らによって庚申塔が造立されました。庚申塔には青面金剛（せいめんこんごう）や猿田彦（さるひこ）などが祀られ、朝を知らせるといふ鶏や、「見ざる・聞かざる・言わざる」の三猿などが彫られているものが多く見られます。

**馬頭観音** 馬の頭部を冠した姿が

特徴の観音で、民間では牛馬の守り神や、死んだ牛馬の供養として祀られました。市内では、荷運びの険しい山道の多い北部や、ツクレバ（繕い場）と呼ばれる牛馬の爪切り場、死んだ牛馬を置く馬捨て場であった場所で見られます。

**聖観音** 観音には様々なバリエー

ションがあります。聖観音は全ての観音の基で、「観音菩薩」「観世音菩薩」とも呼ばれます。願いを唱えれば聞き入れてくれるとされています。手に蓮華や水瓶を持つている姿が一般的です。

**地藏** 地獄をはじめとする六道を輪廻して苦しむ人々を救済するとされ、人々は死後地獄に堕ちても

地藏の救済を期待して盛んに信仰しました。また、現世においても、地藏が苦しみや災難の身代わりになってくれたり、健康や子ども成長など様々な利益が託された。身近な信仰対象となりました。市内には、六道に分身を一体ずつ配した六体一セットの六地藏も多くあります。

**巡拝塔** 江戸時代、観音霊場の札

所（寺院）巡礼が流行し、有名なものに「西国三十三所」や「秩父三十四所」、「坂東三十三所」などがあります。巡拝塔は巡礼達成により建てられました。また、手軽に巡礼できる近場の霊場として「駿豆横道三十三所」や「伊豆横道三十三所」があり、これらの巡拝塔も多数確認できます。

**水神** 湧水や井戸などの水源地に多く祀られています。人々の生活において水は不可欠であり、水が常時確保できることは何よりも尊いことでした。市内では比奈や今泉などの湧水地帯や、逆に大淵や神戸など水に苦労した地域の水源地に多くあります。また、大正と昭和期のものは、新興の町の水源地や、水道整備の記念に祀られたものが多数見られます。

**秋葉山常夜灯** 秋葉信仰は、火防の神として東海地方を中心に流行し、常夜灯の形で祀られました。各地で秋葉講が生まれ、秋葉の寺社に代表者が参拝しました。現在も市内にある秋葉講は、毎年十二月に集まり、各家で新しいお札を祀ります。

**記念碑** 出来事や史跡などの記録や顕彰を目的としています。「近代以降に多く、インフラ整備など特定の出来事の記念のほか、日清日露戦勝や天皇即位、皇太子御成婚、皇紀二六〇〇年、明治一〇〇年など、国の慶事や節目の年に建てられました。富士市では、溶岩石を積みその上に板碑を据えるタイプが多く、村の青年団などにより建てられました。」

**題目塔** だいぎょうとう 日蓮上人の忌日十月十三日にちなんで、寺院や宗徒により建てられました。塔に刻まれた題目「南無妙法蓮華經」の文字は、ひげのまげ 髻題目と呼ばれる、筆端を髻のよう<sub>う</sub>に走らせた独特の書体がいわれているのが特徴です。富士市は日蓮宗寺院が多いため、題目塔も数多く見られます。

## 石造物を見るとき楽しみ方

漠然と眺めるよりも、じっくり見て石造物一つ一つの個性を楽しもう！

### ①文字を読んでみよう 建立年、建立者名、地名など

- ・彫刻なので比較的くずし字も読みやすい。
- ・彫られた溝の影で見やすくなる。日光の角度や自分の視点を考えよう。
- ・建立年は、元号の文字・年数の上限・干支などで読める部分を組み合わせることで推察可能（p21「年代表」参照）。
- ・地名は、身近な地名を思い浮かべて当てはめると意外と読める。

### ②形を観察しよう 像容、大きさ、表情、持物、けんぞく 眷属など

- ・石造物の姿形は、神仏像の種類によって、表情、手に持っているもの、一緒に彫られているものなどで一定の決まりがある。形から、何の石造物かが推察できる。市販の仏像ハンドブックなどで見比べてみよう。

### ③場所を感じよう 道、辻、町境、川、橋、坂、寺社など

- ・道祖神や道しるべなど、なぜその場所にあるのかを考える。

### ④共通点・相違点を見つけよう 石造物の種類、形態、数量など

- ・道や地域で石造物の内容に偏りがある。地域性や伝播が読み取れる。





# 古路の石造物

## 全体マップ

裏表紙 久沢の双体道祖神

富士山かぐや姫ミュージアム

表紙 鈴川地蔵堂の石造物群

☆お願い☆  
 石造物付近には必ずしも駐車場があるわけではありません。  
 近隣の公共施設等に駐車する場合は、必ず施設の管理者に許可をいただいでください。



世のたゞ人のたゞ  
十里木道に導く

春耕道しるべ第7号「(左) ふじをか江三十三丁 てえしゃほ江一り廿一丁」

じゅうりぎみち にとうしんごう  
十里木道と仁藤春耕の道しるべ

現在の富士市と御殿場市を結ぶ十里木道は、古代からの主要街道で、富士山南東麓と愛鷹山北麓の間を巡っています。しかし、人里離れた山間部を抜けるため、道に迷ってそのまま帰らぬ人もいました。そこで、富士岡に住む仁藤春耕（本名、春吉）は、迷いやすい辻や別れ道の先に道しるべを建てました。明治三十九年から明治四十三年までで、約百三十基もの道しるべを誰に言われることなく無償で建てました。春耕は一般的な農家でしたが、室伏半蔵（P16参照）の偉業を受け一念発起したようです。現在は、富士市から御殿場市までに五十数基確認されるのみとなっています。

11	如意輪観音	昭和二	22	巡拝塔	安永八	33	馬頭観音	嘉永元
10	馬頭観音		21	馬頭観音	天明五	32	馬頭観音	
9	如意輪観音	宝永四	20	阿弥陀如来三尊 「善光寺さん」	文化十四	31	馬頭観音	慶應一
8	道祖神		19	道祖神	慶應四	30	馬頭観音	明治十二
7	馬頭観音	安政六	18	道祖神		29	馬頭観音	明治三十壹
6	題目塔	享和	17	馬頭観音	嘉永七	28	秋葉山常夜灯	天保十二
5	馬頭観音	享和三	16	庚申塔	寛延元	27	題目塔	天明元
4	馬頭観音		15	馬頭観音	明治四	26	巡拝塔 (秩父三十四箇所)	安永四
3	供養塔 (横道二十三番)	明和三	14	馬頭観音(通標)	嘉永三	25	馬頭観音	天保三
2	馬頭観音	寛政十	13	馬頭観音	安政六	24	千手観音	寛永十八
1	馬頭観音カ		12	地藏	昭和六十	23	馬頭観音	天保八





# 愛鷹山の根がっばり 今日へ

バネ



根方街道と福聚院前石造物群 (表26~29)

## 根方街道①

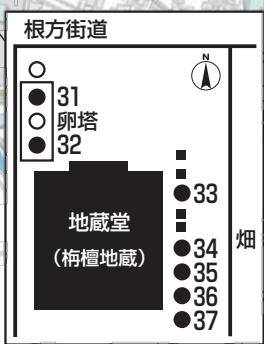
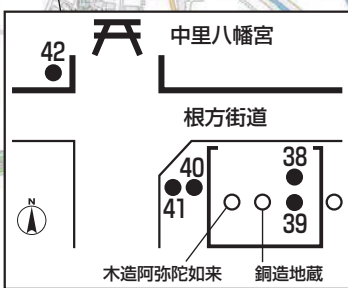
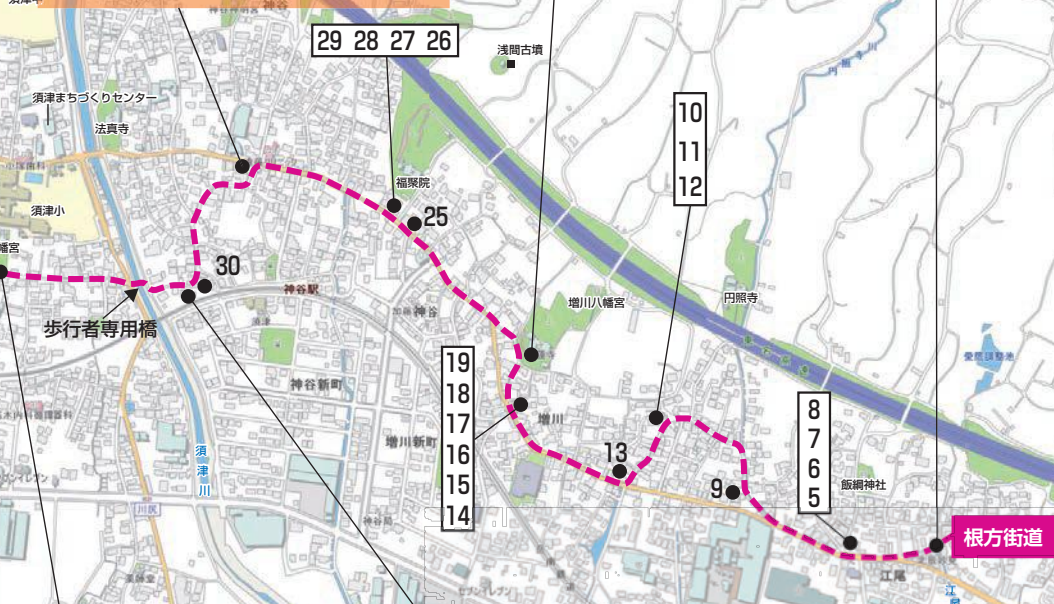
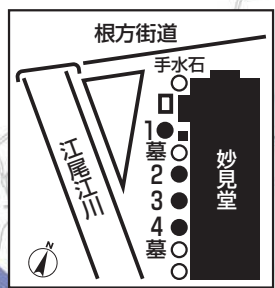
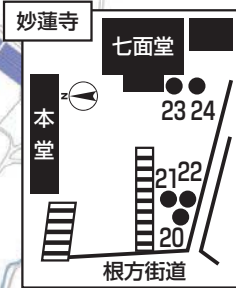
根方街道は愛鷹山南麓沿いを通る道で、古代・中世において東西を結ぶ重要な街道でした。近世東海道の整備以降も主要な街道で、歴史ある町並みを現在も残しています。人の往来が多かったためか石造物が数多く祀られ、また寺社も多く巡礼路としても利用され、当時の信仰の姿が石造物からうかがい知れます。

14	馬頭観音	文化十二	28	道祖神		42	道祖神	
13	道祖神		27	標識(駿豆三十三所札所)	天保十	41	巡拝塔	天明四
12	地蔵 [タンコ地蔵]	文化五	26	道祖神		40	念仏塔	
11	地蔵 [タンコ地蔵]		25	水神	明治十七	39	巡拝塔	文政十
10	地蔵 [タンコ地蔵]		24	庚申塔	延享二	38	地蔵	
9	馬頭観音	昭和三十一	23	題目塔	元禄七	37	馬頭観音	明治四十五
8	庚申塔	元禄十六	22	道祖神		36	馬頭観音	明治三十五
7	庚申塔	寛政八	21	供養塔	安永九	35	馬頭観音	明治四十五
6	念仏塔	元禄十六	20	題目塔	元文三	34	聖観音	安永七
5	庚申塔	寶曆七	19	秋葉山常夜灯	文化十三	33	聖観音力 (向き逆)	
4	馬頭観音		18	聖観音	天明四	32	聖観音	
3	聖観音	安永九	17	道祖神力		31	六地藏	
2	題目塔	寛永元	16	馬頭観音	明治四十一	30	水神	昭和十八
1	道祖神力		15	道祖神力		29	道祖神	





**サイノカミサン (道祖神)**  
 須津地区神谷の道辻にあるこの石造物は「サイノカミサン」として親しまれる舟光背単体立像の道祖神です。7月のお天王さん(厄病退散のお祭り)では、神輿を担ぐ前に皆でお参りする(上写真)など、地域で篤く祀られています。

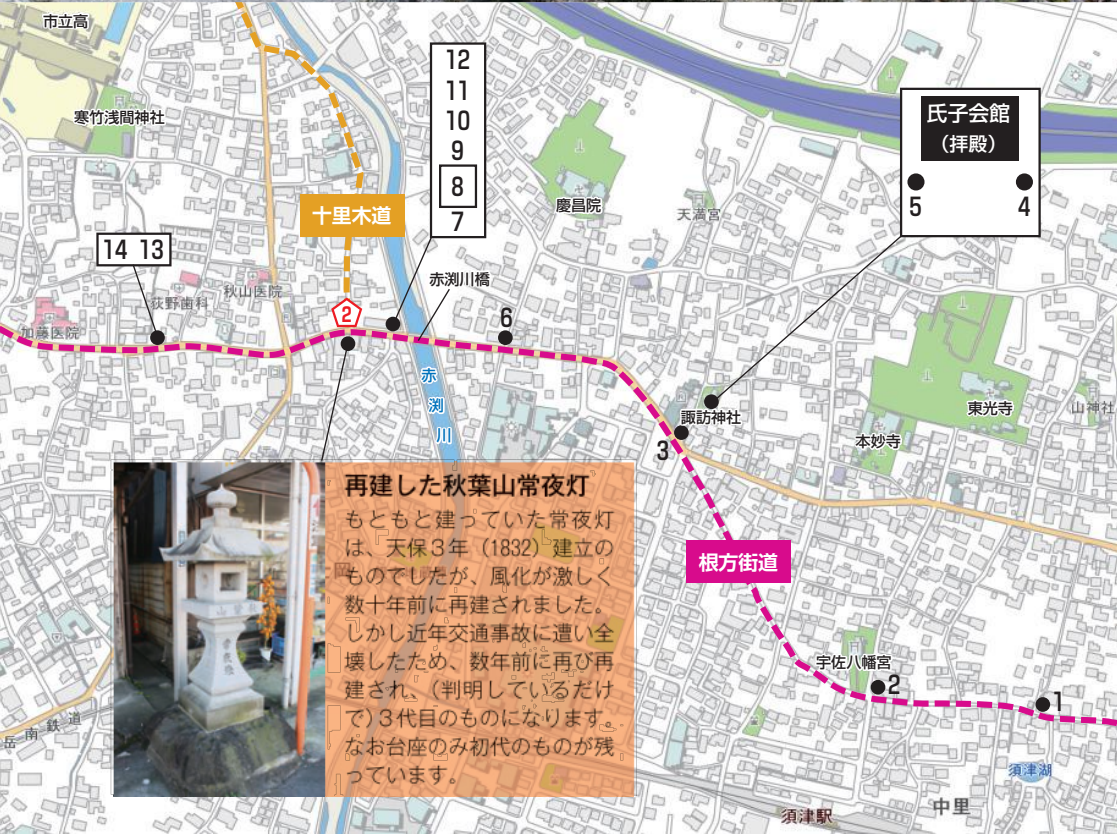




根方路の  
旅にいざなう  
道祖神



根方街道と東比奈の伊豆型道祖神 (表21)





## 根方街道②

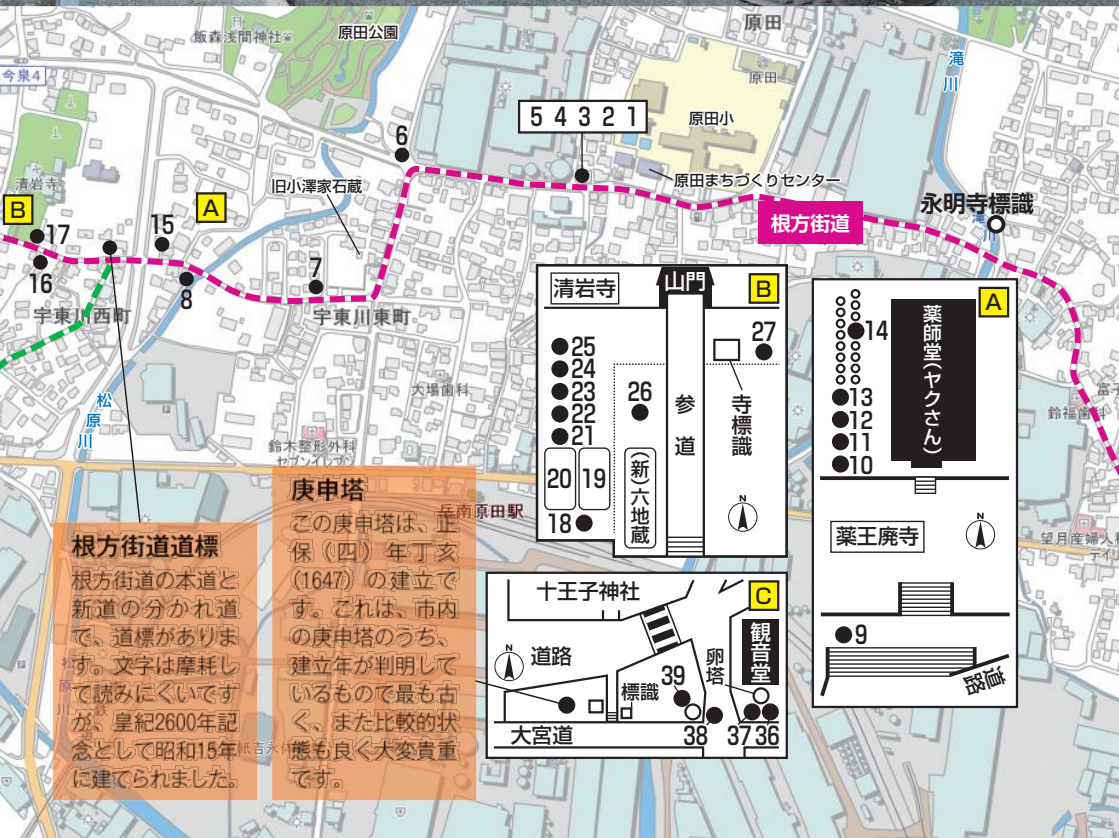
根方街道には道祖神が非常に多くあります。街道沿いに連なる村々では、根方街道が生活の中心となるため、村境や道迂に道祖神を祀り、村の平穏や生活の安全を願ったと思われます。道祖神の形態は、単体の神像、丸彫り僧形の伊豆型が多数を占めており、東方からの文化に影響を受けていることがよく分かります。また、根方街道から十里木道に接続する地点が複数あり、春耕の道しるべも周辺に点在しています。

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
道祖神	庚申塔	道祖神	弁財天	六地藏	巡拝塔 (駿豆横道)	念仏塔	秋葉山常夜灯	身延山灯籠	道祖神	題目塔	三素戔句碑
					延享三	元禄七	安政五	文化十三		寛政七	明治三十三
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
道祖神	道祖神	道祖神力	道祖神	道祖神	風神	道祖神	山神	道祖神	万霊塔	道祖神	秋葉山常夜灯
				慶応一					延宝	元文六	慶応一



# 人生いろいろ 根方もいろいろ 路いろいろ

手前から直進（呼子坂）で近世根方街道及び大宮道に接続、根方街道道標（写真右）左折して和田新道



**根方街道道標**  
根方街道の本道と新道の分かれ道で、道標があります。文字は摩耗して読みにくいですが、皇紀2600年記念として昭和15年に建てられました。

**庚申塔**  
この庚申塔は、正保（四）年丁亥（1647）の建立です。それは、市内の庚申塔のうち、建立年が判明しているもので最も古く、また比較的状态も良く大変貴重です。



## 根方街道③

道は本来歩きやすい地形にできますが、根方街道の起点となる現在の吉原本町は江戸時代の東海道吉原宿で、宿場移転により定まった場所のため、吉原へ接続する道は結果的に坂の多い地域を通りました。そのため、明治39年に平坦で直線的な「和田新道」が開かれました。一方、根方街道は今泉から伝法を抜け富士宮市方面へ向かう「大宮道」（P16-17）に繋がり、その歴史は中世に遡ると考えられます。

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
庚申塔	念仏塔	地藏	万霊塔	秋葉山 常夜灯	道祖神	道祖神	道祖神	馬頭観音	馬頭観音	聖観音力	馬頭観音	馬頭観音
寛文元	貞享三	明和四		大正九	安政五		昭和 五十五		明治八	明治 三十五		文化六
26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
念仏塔	念仏塔	聖観音	馬頭観音	聖観音	念仏塔	六地藏	六地藏	巡拝塔	呼子坂 （石碑） 史跡	巡拝塔 （西国 三十三所）	水神	地藏
天明八	寛文七				文化七		慶応丑 （元）	天明八	大正十三	元文元		昭和十四
39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27
（記念碑） （道路改築）	道祖神	巡拝塔 （西国 三十三所）	馬頭観音	供養塔	題目塔	道祖神	馬頭観音	六地藏	（記念碑） （道路改築）	記念碑 （サツ ラシス） （案約）	道祖神	地藏「くほみ 石」 米すり石
昭和十二	元治二	宝曆一	文政八	昭和二十七	弘化四	文化五	享保二十	昭和三十四	昭和二十六	弘化四	天明六	



**桜地藏**  
堂内の地藏は寛永三年（1626）のもので、市内の地藏のうち制作年が判明しているもので最も古く、「桜地藏」として篤く信仰を集めています。また敷地には多数の墓碑があります。

**「金子曲がり」と十里木道道標**  
この場所は、ここに住む金子家の前を直角に曲がる道筋になっていたため、「金子曲がり」と通称されました。現在は信号のある交差点から今泉郵便局まで直線状に道が新設され、金子曲がりを知る人も少なくなりました。ここを北に行くと十里木道に通ずるため、道標も築かれていましたが、現在は富士山かくや姫ミュージアムに移設されています。

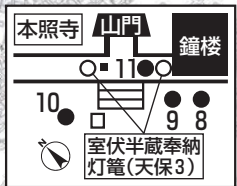
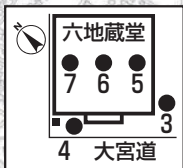






### 道しるべの庚申塔

正面に「青面金剛尊」と刻まれたこの庚申塔は、福泉寺（現普我寺）によって天明六年（1786）に建てられました。側面に「普我兄弟廟所 江一町」「右 甲州道大宮江二里」「左 吉原町江一里」と道案内が彫られています。この地は普我兄弟の仇討ち伝説にゆかりある伝承地で、江戸時代は多くの旅人が福泉寺にある普我兄弟の墓を参拝したことから、庚申塔に道しるべとしての機能を持たせたものと考えられます。



**道祖神**  
元禄十四年(1701) 建立の双体道祖神です。大宮道沿線地域の道祖神は、大宮の影響を受け、双体神像の形態が主流です。

10	6	5	4	3	2	1	室伏半蔵の道しるべ
道標	道標	子待塔	子待塔	子待塔	題目塔	子待塔	
		文政九	天保五	天保五	文政五	文政九	

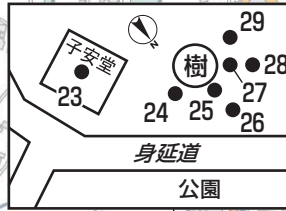






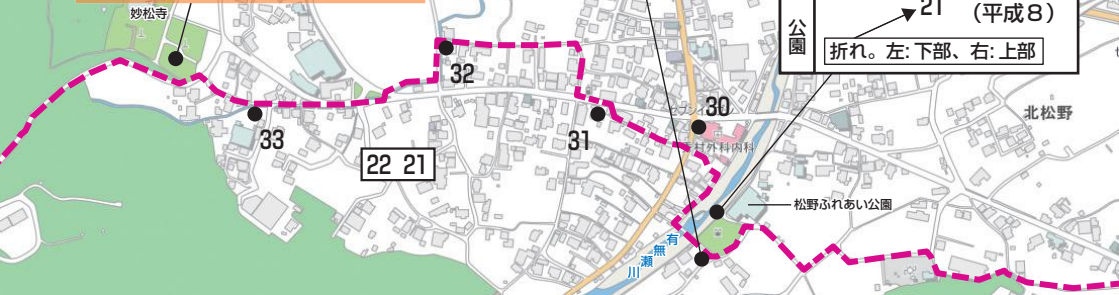
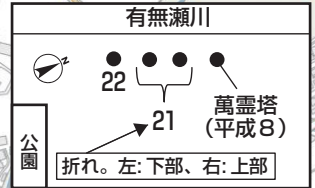
### 妙松寺の石造物群

妙松寺境内・墓地には、多数の石造物が林立しています。法華経を1000部や3000部など読み唱えた記念に建てられる經典読誦塔が30基近くあり、信仰の深さがうかがえます。最も古いものは慶長9年(1604)の建立です。(写真中央)



### つくりい場

ここはかつて牛馬の「つくりい場」でした。身延道の往来に使われた馬のメンテナンスに利用されたと考えられ、馬の道中安全や供養などのための馬頭観音が複数祀られます。



11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
題目塔	馬頭観音	馬頭観音	題目道標	馬頭観音	秋葉山常夜灯	如意輪観音	馬頭観音	題目塔	題目塔	題目塔
文政十二	慶應元	明治三十七	寛延二	明治二十三	文政六	正徳二	文化三	元禄十一	萬治二	元禄十二
22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
馬頭観音	題目道標	顕彰碑(孝子高岡姉妹)	顕彰碑(神戶節三先生)	顕彰碑(節婦久保田の心)	題目塔	念仏塔	念仏塔	秋葉山常夜灯	道祖神(双体)	題目道標
大正七	明和九		大正二	大正十三	安政五	貞享三	萬治二	文化十四	明和二	宝永二
33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
秋葉山常夜灯	題目道標	庚申塔	道標(荒澤不動尊道)	馬頭観音	道祖神(丸石)	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	子女観音
明治二十三	文化十	延宝八		昭和		昭和五十一カ	明治四十一	昭和二十		昭和二

### 松野を通う身延道

江戸時代以降、日蓮宗の本山である甲斐国の身延山久遠寺を参詣する身延参りが庶民の間で盛んになり、東海道から北上する身延道は、参詣路として多くの人に利用されました。

「小車の里」と称された松野地区には、身延道沿いに多くの題目塔や題目道標があります。現在は道路の拡幅や付け替えで、本来の身延道を正確に辿ることはできませんが、わずかに残る曲がりくねった細い道が、古道の面影を感じさせてくれます。

※ルート上で直角に曲がる場所の多くは、道の消失による迂回です。



## その他の主な石造物

### 川原宿の道祖神

旧東海道沿いにある川原宿のこの道祖神は、高さ92センチ×幅70センチと、市内の道祖神の中でもとりわけ大きな伊豆型の丸彫単体道祖神です。いつ誰が祀ったのかは分かりませんが、明治末に民俗学者の山中共古やまなかきうこがこの道祖神を記録しており、当時から存在感のある石造物であったことがうかがえます。



### 万太郎塚の石造物群

江戸時代、命を落とした菅野万太郎を供養した場所ですが、現在塚は残っていません。敷地内は、いわゆる写し霊場として、西国三十三所観音の各札所みだしよに見立てた石造の観音像が並べられ、容易に巡礼に行けない周辺地域の人々がお参りしました。文久元年（一八六一）に、田子浦地区や横割、平垣、水戸島等の有力者が寄進しています。その他、庚申塔や地藏等も祀られています。



### 市内最古の石造物 念仏塔

建立年が判明している石造物（墓は除く）のうち、市内で最も古い慶長元年（一五九六）建立のもので、根方街道沿いにあります。正面に「南無阿弥陀仏」と彫られたシンプルな文字碑で、裏面に「慶長二元丙申」とあります。

市内では唯一、江戸時代より前のものので、根方街道の歴史の深さを物語る貴重な石造物です。

※個人の敷地内に祀られ、普段立ち入ることができないため、本書では位置を公開していません。





# 年 代 表

年号	干支	西曆	年号	干支	西曆	年号	干支	西曆	年号	干支	西曆	年号	干支	西曆	年号	干支	西曆			
慶長 1	丙申	1596	承応 1	壬辰	1652	5	戊子	1708	明和 1	甲申	1764	3	庚辰	1820	9	丙子	1876	7	壬申	1932
2	丁酉	1597	2	癸巳	1653	6	己丑	1709	2	乙酉	1765	4	辛巳	1821	10	丁丑	1877	8	癸酉	1933
3	戊戌	1598	3	甲午	1654	7	庚寅	1710	3	丙戌	1766	5	壬午	1822	11	戊寅	1878	9	甲戌	1934
4	己亥	1599	明曆 1	乙未	1655	正徳 1	辛卯	1711	4	丁亥	1767	6	癸未	1823	12	己卯	1879	10	乙亥	1935
5	庚子	1600	2	丙申	1656	2	壬辰	1712	5	戊子	1768	7	甲申	1824	13	庚辰	1880	11	丙子	1936
6	辛丑	1601	3	丁酉	1657	3	癸巳	1713	6	己丑	1769	8	乙酉	1825	14	辛巳	1881	12	丁丑	1937
7	壬寅	1602	万治 1	戊戌	1658	4	甲午	1714	7	庚寅	1770	9	丙戌	1826	15	壬午	1882	13	戊寅	1938
8	癸卯	1603	2	己亥	1659	5	乙未	1715	8	辛卯	1771	10	丁亥	1827	16	癸未	1883	14	己卯	1939
9	甲辰	1604	3	庚子	1660	享保 1	丙申	1716	安永 1	壬辰	1772	11	戊子	1828	17	甲申	1884	15	庚辰	1940
10	乙巳	1605	寛文 1	辛丑	1661	2	丁酉	1717	2	癸巳	1773	12	己丑	1829	18	乙酉	1885	16	辛巳	1941
11	丙午	1606	2	壬寅	1662	3	戊戌	1718	3	甲午	1774	天保 1	庚寅	1830	19	丙戌	1886	17	壬午	1942
12	丁未	1607	3	癸卯	1663	4	己亥	1719	4	乙未	1775	2	辛卯	1831	20	丁亥	1887	18	癸未	1943
13	戊申	1608	4	甲辰	1664	5	庚子	1720	5	丙申	1776	3	壬辰	1832	21	戊子	1888	19	甲申	1944
14	己酉	1609	5	乙巳	1665	6	辛丑	1721	6	丁酉	1777	4	癸巳	1833	22	己卯	1889	20	乙酉	1945
15	庚戌	1610	6	丙午	1666	7	壬寅	1722	7	戊戌	1778	5	甲午	1834	23	庚寅	1890	21	丙戌	1946
16	辛亥	1611	7	丁未	1667	8	癸卯	1723	8	己亥	1779	6	乙未	1835	24	辛卯	1891	22	丁亥	1947
17	壬子	1612	8	戊申	1668	9	甲辰	1724	9	庚子	1780	7	丙申	1836	25	壬辰	1892	23	戊子	1948
18	癸丑	1613	9	己酉	1669	10	乙巳	1725	天明 1	辛丑	1781	8	丁酉	1837	26	癸巳	1893	24	己丑	1949
19	甲寅	1614	10	庚戌	1670	11	丙午	1726	2	壬寅	1782	9	戊戌	1838	27	甲午	1894	25	庚寅	1950
元和 1	乙卯	1615	11	辛亥	1671	12	丁未	1727	3	癸卯	1783	10	己亥	1839	28	乙未	1895	26	辛卯	1951
2	丙辰	1616	12	壬子	1672	13	戊申	1728	4	甲辰	1784	11	庚子	1840	29	丙申	1896	27	壬辰	1952
3	丁巳	1617	延宝 1	癸丑	1673	14	己酉	1729	5	乙巳	1785	12	辛丑	1841	30	丁酉	1897	28	癸巳	1953
4	戊午	1618	2	甲寅	1674	15	庚戌	1730	6	丙午	1786	13	壬寅	1842	31	戊戌	1898	29	甲午	1954
5	己未	1619	3	乙卯	1675	16	辛亥	1731	7	丁未	1787	14	癸卯	1843	32	己亥	1899	30	乙未	1955
6	庚申	1620	4	丙辰	1676	17	壬子	1732	8	戊申	1788	弘化 1	甲辰	1844	33	庚子	1900	31	丙申	1956
7	辛酉	1621	5	丁巳	1677	18	癸丑	1733	寛政 1	己酉	1789	2	乙巳	1845	34	辛丑	1901	32	丁酉	1957
8	壬戌	1622	6	戊午	1678	19	甲寅	1734	2	庚戌	1790	3	丙午	1846	35	壬寅	1902	33	戊戌	1958
9	癸亥	1623	7	己未	1679	20	乙卯	1735	3	辛亥	1791	4	丁未	1847	36	癸卯	1903	34	己亥	1959
寛永 1	甲子	1624	8	庚申	1680	元文 1	丙辰	1736	4	壬子	1792	嘉永 1	戊申	1848	37	甲辰	1904	35	庚子	1960
2	乙丑	1625	天和 1	辛酉	1681	2	丁巳	1737	5	癸丑	1793	2	己酉	1849	38	乙巳	1905	36	辛丑	1961
3	丙寅	1626	2	壬戌	1682	3	戊午	1738	6	甲寅	1794	3	庚戌	1850	39	丙午	1906	37	壬寅	1962
4	丁卯	1627	3	癸亥	1683	4	己未	1739	7	乙卯	1795	4	辛亥	1851	40	丁未	1907	38	癸卯	1963
5	戊辰	1628	眞享 1	甲子	1684	5	庚申	1740	8	丙辰	1796	5	壬子	1852	41	戊申	1908	39	甲辰	1964
6	己巳	1629	2	乙丑	1685	寛保 1	辛酉	1741	9	丁巳	1797	6	癸丑	1853	42	己酉	1909	40	乙巳	1965
7	庚午	1630	3	丙寅	1686	2	壬戌	1742	10	戊午	1798	安政 1	甲寅	1854	43	庚戌	1910	41	丙午	1966
8	辛未	1631	4	丁卯	1687	3	癸亥	1743	11	己未	1799	2	乙卯	1855	44	辛亥	1911	42	丁未	1967
9	壬申	1632	元禄 1	戊辰	1688	延享 1	甲子	1744	12	庚申	1800	3	丙辰	1856	大正 1	壬子	1912	43	戊申	1968
10	癸酉	1633	2	己巳	1689	2	乙丑	1745	享和 1	辛酉	1801	4	丁巳	1857	2	癸丑	1913	44	己酉	1969
11	甲戌	1634	3	庚午	1690	3	丙寅	1746	2	壬戌	1802	5	戊午	1858	3	甲寅	1914	45	庚戌	1970
12	乙亥	1635	4	辛未	1691	4	丁卯	1747	3	癸亥	1803	6	己未	1859	4	乙卯	1915	46	辛亥	1971
13	丙子	1636	5	壬申	1692	寛延 1	戊辰	1748	文化 1	甲子	1804	万延 1	庚申	1860	5	丙辰	1916	47	壬子	1972
14	丁丑	1637	6	癸酉	1693	2	己巳	1749	2	乙丑	1805	文久 1	辛酉	1861	6	丁巳	1917	48	癸丑	1973
15	戊寅	1638	7	甲戌	1694	3	庚午	1750	3	丙寅	1806	2	壬戌	1862	7	戊午	1918	49	甲寅	1974
16	己卯	1639	8	乙亥	1695	宝曆 1	辛未	1751	4	丁卯	1807	3	癸亥	1863	8	己未	1919	50	乙卯	1975
17	庚辰	1640	9	丙子	1696	2	壬申	1752	5	戊辰	1808	元治 1	甲子	1864	9	庚申	1920	51	丙辰	1976
18	辛巳	1641	10	丁丑	1697	3	癸卯	1753	6	己巳	1809	慶応 1	乙丑	1865	10	辛酉	1921	52	丁巳	1977
19	壬午	1642	11	戊寅	1698	4	甲辰	1754	7	庚午	1810	2	丙寅	1866	11	壬戌	1922	53	戊午	1978
20	癸未	1643	12	己卯	1699	5	乙亥	1755	8	辛未	1811	3	丁卯	1867	12	癸亥	1923	54	己未	1979
正保 1	甲申	1644	13	庚辰	1700	6	丙子	1756	9	壬申	1812	明治 1	戊辰	1868	13	甲子	1924	55	庚申	1980
2	乙酉	1645	14	辛巳	1701	7	丁丑	1757	10	癸酉	1813	2	己巳	1869	14	乙丑	1925	56	辛酉	1981
3	丙戌	1646	15	壬午	1702	8	戊寅	1758	11	甲戌	1814	3	庚午	1870	昭和 1	丙寅	1926	57	壬戌	1982
4	丁亥	1647	16	癸未	1703	9	己卯	1759	12	乙亥	1815	4	辛未	1871	2	丁卯	1927	58	癸亥	1983
慶安 1	戊子	1648	宝永 1	甲申	1704	10	庚辰	1760	13	丙子	1816	5	壬申	1872	3	戊辰	1928	59	甲子	1984
2	己丑	1649	2	乙酉	1705	11	辛巳	1761	14	丁丑	1817	6	癸酉	1873	4	己巳	1929	60	乙丑	1985
3	庚寅	1650	3	丙戌	1706	12	壬午	1762	文政 1	戊寅	1818	7	甲戌	1874	5	庚午	1930	61	丙寅	1986
4	辛卯	1651	4	丁亥	1707	13	癸未	1763	2	己卯	1819	8	乙亥	1875	6	辛未	1931	62	丁卯	1987



<お問い合わせ>

富士市 市民部 文化振興課 文化財担当  
〒417-8601 静岡県富士市永田町1-100  
TEL 0545-55-2875 FAX 0545-53-0789

平成30年3月発行